

パーソンズ社會學の心理學的基礎 (I)

南 博

最近のアメリカ社會學における社會體系の理論としては、パーソンズ Talcott Parsons の社會體系論、ガース Hans Girth とミルズ C. Wright Mills による社會構造論、およびマーソン Robert K. Merton による社會構造と文化構造の理論など、いくつかの大きな流れがみられる。⁽¹⁾

この中で、パーソンズの社會體系論は、社會行動の心理的な土臺から出發しており、その分析にあたって、心理學者との共同研究が行われ、現代の心理學が到達した成果をできるだけ取り入れようとするところに、ひとつの特色がある。パーソンズの社會學は歴史的な觀點に缺けてゐる點で批判されるが、彼のよつて立つ心理學的な前提そのものについて検討すれば、そこにみられる心理學主義と、歴史的な觀點の缺除が、無縁でないことがわ

かる。

パーソンズのよつてゐる心理學の立場を知るには、彼が、社會學、心理學、文化人類學の研究者と行った共同研究の成果である、『行爲の一般理論をめぐつて』 Toward a General Theory of Action. 1951 (以下『一般理論』と略す) から見ていくのが、もっとも適當であろう。

この研究は、ハーヴァード大學の社會關係學部に屬する心理學者オルボート Gordon W. Allport、ヤンナー Henry A. Murray、シャーツ Robert R. Sears、シールドン Richard C. Sheldon、社會學者スタウフマー Samuel A. Stouffer、文化人類學者クラックホーン Clyde Kluckhohn、およびシカゴ大學の社會學者シルズ Edward A. Shils、カリフォルニア大學の心理學者トールマン Edward C. Tolman が、一九四九—五〇年にか

てハーヴァードで行った討議の結果をまとめたものである。それはアメリカで近年しばしば試みられている隣接諸科學の協力による研究計畫のなかでも、畫期的な業績であるといえよう。

同書は、「行爲の一般理論」、「價值、動機、および、行爲の體系」、「心理學的モデル」、「行爲理論とその應用」の四部から成るが、第一部の基礎理論に、共同研究者のあいだでほぼ一致した理論の輪廓が、行爲の心理的な土臺の分析を中心に展開されている。

まず、「行爲」Actionとは「生體の行動」behavior of a living organism のうち、「それが向けられている豫期の事態、それがおこる状況、行動の規範的な調整 normative regulation (たとえば知性 intelligence)」、および、エネルギーの消費あるいは「動機づけ」motivation という項目として分析され得るもの」と規定される⁽²⁵⁾。

行爲は、「行爲者」actor の行爲であり、おのおのの行爲者は「對象との關係」relations-to-objects の體系をもつてゐる。それを「位置づけの體系」system of orientations とよぶ⁽²⁶⁾。

ここで體系というのは、「經驗的な諸現象の複合體の

なかに、相互依存の確定した諸關係が存在する⁽²⁷⁾」ことを指す。もちろん、ここでいう體系は、經驗的體系 empirical system であり、理論的體系ではない。このような體系は、「諸部分あるいは諸變數の相互依存」をその最も一般的、基本的な特性としている。この相互依存は、「秩序」order であり、それは、最も一般的な表現に従えば、「均衡」equilibrium の概念に相當する「自己維持」self-maintenance である。しかし、均衡は、必ずしも靜止的な自己維持ではなく、生長過程にみられるような、「動く均衡」moving equilibrium もある。しかし、いずれのばあいにも、體系内の諸關係は確定しており、どんなことでも起り得る、というわけにはいかない⁽²⁸⁾。そうして、體系には、その接する環境との境界内で、均衡を維持しようとする傾向がある。その最もよく知られた例は、生體である。

このような均衡維持に必要な、二つの基本的な過程として、「配分」allocation と「統合」integration がある。配分とは、「ある一定の均衡状態を維持するために、體系内の構成要素あるいは部分の分布を維持する過程」であり、統合とは、「外部環境の變動に當って、ひとつの

全體としての體系の内部にある特性と外部との境界が保持されるように、環境との諸關係を調停する過程」である。⁽⁶⁾

「行為の體系」system of action は、行為の位置づけの複合體である。

行為の位置づけは、対象を位置づけ、特徴づける「認知的な辨別」cognitive discrimination と、その底によじたわり、対象に正(ポジティブ)あるいは負(ネガティブ)に反應する傾向としての、位置づけの「カセクティックな様相」cathectic mode である。このカセクシス cathexis は、満足と與える対象に近づき、嫌惡する対象を拒否することであり、「動因」drive の満足と、動機づけのなかの動因の組織に關係してくる。ここで動因とは、「動機づけのなかで、生物的エネルギーの部分と遺傳的な素質」を指す。さらに辨別は、一定の「評價」evaluation の規準に従って行われる。

行為の位置づけは、三つの「形態」configuration をとる。その第一は、「パーソナリティー體系」personality system であり、それは、「だれか一定の行為者の行為の位置づけと、それともなう動機づけの過程が、ひ

とつの分化し、統合した體系になったもの」である。パーソナリティーは、「ひとりの行為者個人の行為の位置づけと動機づけの、統一された體系」である。

第二に、共通の状況におかれている多数の行為者の相互行為が、分化し統合されるとき、「社會體系」social system となる。社會體系は、「個人の行為者たちの、社會的な相互行為に内在する、または、そこから生じてくる諸問題を中心に組織化される。」

第三に、「人為的産物」artifacts の「複合體」body および、シムボルの體系として存在する「文化」culture がある。文化それ自體は、行為の體系として組織化されておらず、従って、體系としての文化は、パーソナリティーや社會體系とは、ちがった平面にある。⁽⁸⁾

この文化的な要素は、二つの方法で分類される。第一に、動機づけのなかで、どの様相が優越するかに應じてきまってくる、優越した關心のタイプによって分けられる。そこでは、三つのクラスが區別される。(1)「觀念」idea あるいは「信念」belief の體系。認知的關心の優越。(2)「表現的シンボル」expressive symbols の體系。たとえば、藝術的な造型やスタイル。カセクティックな

關心が優越。(3)「價值づけ」value orientation の體系。これは動機づけのばあい、認知、カセクシス、評價の三様に應じて認知の様相、「鑑賞的」appreciative 様相、および道徳の様相に分れる。第二に、文化は、状況のなかに對象として存在するばあいと、行為者の位置づけの體系のなかに内在化されているばあいとがある。次に進むまえに以上のことを要約してみると、次のようになる。

(I) 行為の位置づけの體系

- 1. 動機づけ——認知、カセクシス、評價の様相
- 2. 價值づけ——認知、鑑賞、道徳の様相

(II) 行為の體系の三つの形態

- 1. パーソナリティ體系(個人の行為者にかんする)
- 2. 社会體系(複数の行為者の相互行為にかんする)

行為の體系

- 3. 文化體系(人為的産物とシムボルにかんする)

- a、觀念・信念
- b、表現的シンボル
- c、價值づけ

右のような要約が、パーソナルの行動理論の、いわば骨格であり、それは、社会を説明するのに、個人のパーソナリティから出發するという意味で、社会心理学的なアプローチとよんでもさしつかえない。

パーソナル理論の出發點になるパーソナリティは、古典的な心理學理論に沿って、まず、行動の原動力である欲求を、土臺にして考えられている⁽⁹⁾。その欲求。この欲求理論が、生理的あるいは「臓器因」viscerogenicの欲求からはじまるのは、社会心理學の土臺として生理的心理學を、おくからである。その例として、非常に特定の睡眠と呼吸の欲求や、それよりも特定のではない食物への欲求などがあげられる。しかし、そのような、體質に規定される欲求の對象と、その満足の様相には、大きな變異がみられる。

臓器因の欲求とならんで、「社会關係」social relationshipsの欲求もある。それには、體質に規定されるものもあれば、臓器因の欲求を満足させるために、間接に必要とされる結果、派生し、ついで自律性を持つようになったものもあるだろう。

これらの欲求が行為を左右する方向と様相は、行為の

状況がもたらす影響によって變容される。また欲求自體も變容され得る。あるいは、すくなくとも、それが行爲におよぼす効果は變容され得る。それは、欲求が、「欲求傾向」need-dispositionsのなかに、はめこまれるからである。

この欲求傾向ということばは、行爲のなかで、動機づけの單位が、二つの方向を持つことを強調するために使われている。その一方では、パーソナリティー(および生體)としての行爲者の均衡があり、もう一方には、一つ、あるいは、それ以上の對象に向って行爲しようとする傾向がある。この欲求傾向は、個々の欲求よりも高度に組織化され、臓器因の欲求にはふくまれない動機づけと評價の要素をふくんでいる。

欲求傾向の體系は、狀況對象の體系のなかで欲求満足「欲求阻止」need-blocking あるいは「欲求奪取」deprivation のばあいに「正負の辨別」positive-negative discrimination をする。

特定の臓器因の欲求と欲求傾向のほかに、人間は、對象、とりわけ、他の人間に反應する「體質的な能力」constitutional capacity を持つており、他の對象に對する

「感受性」sensitization をそなえている。この感受性は、相互行爲のばあい、とりわけ重要になる。そこでは、對象とのあいだに愛着を形成する正の傾向と、對象を避け、傷けようとする負の傾向とが生れる。

認知的な位置づけとカセクティックな位置づけ⁽¹⁰⁾。動因と欲求に動かされる行爲者は、二つの、切りはなすことのできない様相のなかで位置づけられる。そのひとつは、對象の認知的な辨別であり、他のひとつは、對象のカセクティックな辨別である。このような辨別が、安定した組織になったとき、位置づけの體系が生まれる。そうして、行爲者は、對象を「撰ぶ」select か、文化の規定する撰擇に「従う」commit かする。この撰擇の、おそらく最も原始的なかたちが、受容と拒否である。さらに、カセクティック・認知的な位置づけは、時間的な経過のなかでいつも、「期待」expectations をよくんでいる。それは、未來の出來事に對する位置づけである。期待と評價⁽¹¹⁾。満足の機會がいくつかあって、どれかを撰ぶというばあいには、そのうちのひとつに決定すること、その機會のもたらす結果に照らして「判定」assess することが必要である。これを、「評價」evaluation と

よぶ。評價は、より複雑な選擇の過程である。

學習。⁽¹²⁾「學習」learningとは、對象の世界(行爲者のパーソナリティー、觀念、文化、社會的對象などをふくむ)への位置づけの新しい様相を獲得することである。學習で最も重要なのは「一般化」generalizationであり、それは、行爲者が未経験の特定の對象についてする位置づけを規定する様相である。それは、状況の中にある、特定の具體的な對象を、一般的な類に範疇化することであり、文化シムボルの體系を獲得するのに、おそらく最も重要な學習メカニズムなのである。一般化は、認知・カセクション・期待についておこる。

期待の相互行爲と相補性。⁽¹³⁾行爲者は、他の行爲者を對象として相互行爲に入るが、そのような對象は、「社會的對象」social objects あるは「他我」altersであり、自我と他我は相互に期待しあって、そこに期待の「相補性」complementarityが生れる。相互行爲の體系は、他我的期待にそよような自我の「同調」conformityの範圍で規定されてくる。自我の行爲に對する他我的反應は、「サンクション」sanctionとよばれる。それは、他我的正の反應に對する自我の欲求満足と、他我的負の反

應に對する自我の欲求奪取ともとづいている。

期待の相補性は、サンクションの行爲あるいは態度を生み、そこには、自我と他我が「共有するシムボル體系」shared symbolic systemがつくられる。この體系は、自我と他我に共通な規範の位置づけをふくみ、論理的にいつて、文化の最も原初的な形態である。文化は、標準(價值づけの)を提供する。

相互行爲とパーソナリティーの發達。⁽¹⁴⁾「社會化」socializationの過程にとって缺くことのできないメカニズムは、「同一化」identificationの發達である。同一化には、(1)「手本」modelの價値を内面化すること、(2)彼の特定の役割を内面化すること、二つの意味があるが、いずれのばあいにも、内面化されるのは、價値のパターンであつて、行爲ではない。社會化の過程を通じて、期待の體系が組織され、また、臟器因の欲求は、文化的に組織された欲求になる。

體系としてのパーソナリティー。⁽¹⁵⁾満足への努力が、いろいろな對象と場合のなかに分布され、満足への機會が、いろいろな欲求傾向のなかに分布されるのが、「配分」allocationの過程である。配分とは、ある特定の狀

況におかれている體系の機能に一致するようなかたちで、その體系の内部に、重要な構成要素を分布させることである。パーソナリティーでは、いろいろな欲求傾向が統合されている。それは、自律的であり、社會狀況の變動に應じて變動するとはかぎらない。

パーソナリティーと社會的役割⁽¹⁶⁾。自我と他我は、互いに、一定の狀況條件のもとでは、一定の、比較的特定な仕方⁽¹⁷⁾で、あるいは少くとも、比較的特定な限界内で、行動することを期待する。これを「役割期待」role-expectations とする。自我の役割は、「制度化された規定」institutionalized definition を受ける。「制度化」institutionalization とは、價値の共通な規範のパターンをもっている役割の相互行為體系のなかで、行為者の期待が統合されることである。各人は、他人の價値のパターンに同調することを賞し、それから逸脱することを非難するように傾向づけられている。

行為體系の文化的側面⁽¹⁷⁾。文化の三つのパターンは、それぞれ、動機の位置づけの三つの様相に並行している。觀念の體系は、認知的な諸問題の解決に、表現的シンボルの體系は、感情を、如何に適切に表現するかという問

題の解決に、そうして、價値づけの體系は、評價の諸問題(特に、しかし、必ずしも常にではないが、社會的相互行為のなかで)の解決である。このなかで、價値づけの體系は、とりわけ決定的な意義をふくんでいる。というのは、そのうちの一つの類は、役割期待とサンクションを構成するようになる相互の權利と義務のパターンを規定するからである。(他の類の價値づけは、認知的、鑑賞的な判断の「標準」standards を規定する。)文化のパターンは、體系に組織され、そこに「パターンの一貫性」consistency of pattern がみられるのが特徴である。たとえば信念の體系における論理的一貫性、藝術の形式にみられるスタイルの調和性、道徳的なおきての合理的な齊合性など。「外面的あるいは外示的な文化」overt or explicit culture は、ほとんどいつも、一見、斷片的に見える。ただ、特殊な条件のもとで、たとえば、觀念や法律の體系などの非常に洗練された體系では、外面的な組織化がみられる。しかし、そのような組織化がないところでも、「内潛的」implicit な文化の底によこたわっている、共通な約束を發見しなければならない。大規模で複雑な社會體系では、文化の完全な一貫性に近似するも

のは決してあり得ない。そうして、文化パターンの「統合不全」mal-integration が、統合と同様に重要である。

文化パターンの内面化⁽¹⁸⁾。内面化された価値づけの、あるものは、「超自我構造」superego structure の一部分と、制度化された役割期待の一部分となる。文化パターンは内面化されると、パーソナリティと社会体系の構成要素になる。すべての具体的な行為体系は、同時に、一つの文化体系を持ち、そうして、多くのパーソナリティ(あるいはその部分)のセットと、一つの社会体系あるいは下位体系をふくんでいる。しかも、この三つは、概念的には、行為の諸要素の、おのおの獨立した組織なのである。文化のダイナミックな理論は、文化体系のあるタイプが、また、あるタイプのパーソナリティあるいは社会のなかに存在する条件を研究する。

社会体系⁽¹⁹⁾。多くの個人の相互行為の体系としての社会体系は、個々の行為者間の諸関係から成っている。社会構造の最も重要な單位は、「役割」roleである。役割は、ひとりの行為者の位置づけの組織された部分であり、相互行為過程への参加を構成、規定する。役割は、支配的

な文化パターンと完全に一致し、道徳的にサンクションを與えられた価値づけのパターンへの同調の期待をめぐって組織されるとき、制度化される。行為者の役割を、彼のパーソナリティの全体系から抽象すれば、社会体系の組織とパーソナリティの「關連」articulationを分析することが可能になる。社会的役割の大きな部分についてみられる重要な特徴は、それを構成する行為が、細かい点まであらかじめ規定されておらず、ある範囲内の「變異」variability が正當とみなされている、ということである。だから、ちがったパーソナリティの行為者でも、ほぼ同一の役割期待を、過重な負擔なしに實現できるのである。役割期待とサンクションは、個々の行為者に「壓力」pressureをかけるから、パーソナリティに重大な影響をもたらず負擔になることもある。そうして、この影響が、いろいろなタイプの行為になつてあらわれ、それが逆に、社会統制のメカニズムをさらに發展させたり、變動への壓力を生んだりする。このようにパーソナリティと役割構造とは、密接に關係する体系なのである。

社会体系の構造的な役割は、パーソナリティ体系に

おける欲求傾向の構造とおなじく、価値選擇に位置づけられる。社會體系の維持にとって最も重要な「機能上の要請」functional exigencies は、おなじ體系に屬する個人たちのしめす價值づけが、なんらかの仕方、ひとつの共通な體系に統合されなければならない、ということである。もちろん、觀念と表現的なシムボルの諸體系も、また、社會體系の安定にとって、非常に重要である。

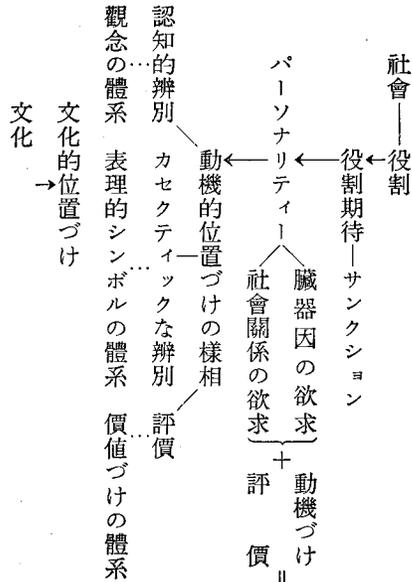
パーソナリティーとおなじく、社會體系でも、機能の問題は、配分と統合の問題として要約される。いろいろな機能は、いろいろな役割に配分され、そのために役割と、役割の下位體系が分化する。また、それに加えて人的配置、「用具」facilities と報酬との配分の決定は、評價の基準に従う選擇の過程をふくんでいる。社會體系の構造は、多くの個人による多くの選擇の蓄積し、均衡した結果が、價值バターンの制度化で安定し、強化されたものとみなされる。權利と義務にかんする、一般的な、道徳上の「コンセンサス」consensus は、社會體系の構造の、ひとつの基本的な構成要素である。配分にかんする決定が行われるための特別な制度的構造には、「力」power と「威光」prestige をそなえた制度的役割が重

要である。

社會體系は、多くの行為者の相互行為關係の體系である。「社會」society とは、それ自體の内部に、「自足的」self-subsistent な體系の維持にとって缺くことのできない、すべての前提條件をふくんでいるようなタイプの社會體系をいう。それらの前提條件のなかで、主要なものは、(1)地理的な境界の位置と血縁關係を中心とする組織、(2)機能を決定し、用具と報酬を配分する體系、(3)配分を統制し、抗争と競争を調整するための統合的な構造である。

以上のように、パーソンズの行為理論は、パーソナリティーと文化と社會の體系を行為者の、ある状況に對する位置づけという概念で、處理しようとするのである。ここで、もう一度、その理論體系を整理してみよう。

このような概括の上でパーソンズの行為理論を見わたすと、そこにふくまれる心理學的な土臺の意味が、はっきりして来る。以下、その面にかぎって、パーソンズ理論を檢討しよう。なおこのばあいには、「行為の一般理論」にかぎらず、その後に發表された諸研究にせめされ



た見解にもふれていくことにする。
 社会科学の心理学的な土臺としてのすべての行為理論
 あるいは行動理論の根底には、動機づけと欲求の問題が
 よこたわっている。パーソナルたちの心理学理論の検討
 に際しても、まず、この動機づけの概念からはじめなけ
 ればならない。

『一般理論』における動機づけと欲求の諸見解
 『一般理論』には、「動機づけ」motivationと、「動機

的位置づけ」motivational
 orientationと云ふことはが
 しばしば使われており、とり
 わけ後者がパーソナリティー
 體系の核心とされている。と
 ころが、その動機づけという
 概念は、はっきり規定されて
 いるとはいえない。たとえば

『一般理論』では、第二部第
 二章「行為の體系としてのパ
 ーソナリティー」のはじめ
 に、「動機づけ」を三つに分けて
 いる。⁽²⁰⁾第一に「行為に
 際してあらわれる、生物的に
 発生したエネルギー」ある
 いは動因 drive、第二に「ある
 目標対象(あるいは、實際
 には目標対象との関係)を獲
 得するための、生體の傾向
 群」^{ヒット}あるいは「諸動因」
 drivesがある。この諸動因は、
 「先天的な」innate 傾向である
 が、これにたいして、
 第三の「欲求傾向」need-dispositions
 は、「行為の過程
 自體を通じて獲得された後天的な」
 傾向である。そうして、
 動機づけは、ばあいによって
 このうちのどれかを指

す、ひろい意味にとっている。

しかし、中心になる「諸動因」の概念も、明確ではない。というのは、すぐそれにつづく個所で「最も原始的な生體のレベルでの諸動因は、『自動的』な調節手段とみなされるから、行為理論でいわれる諸動因や欲求傾向とはちがう」とされる。動物が対象へと位置づけられるとき、それは自動的に、一つの動因をひきおこす。その動因は、位置づけられた対象に、カセクシスをもたらし、行為と満足が自動的におこなわれる。そこには、撰擇がない。

ここで、パーソンズは、「最も原始的な生體のレベルでの諸動因」は極限概念で、動物と人間に、実際にはみられないものかもしれないと、用心深くつけ加えている。そうだとすれば、「諸動因」ということばでよぶことも不適當であり、混乱させるだけであろう。また、ここでいう、「自動的」ということばの意味も、はっきりしない。動物の行動にかんする心理學的な研究に照らしてみても、單にその場の状況にだけ緊縛されて、機械的に、自動的に、動因が觸發されるということは、下等動物以外にはみられない。従って、パーソンズみずからいうよう

に、純粹に「自動的」な諸動因ということ、人間行為の理論で考える必要はないようである。もっとも、パーソンズは、元來、生物學に關心が深く、とりわけ、生體の生理的機能の自動的調節や、ホメオステシスのメカニズムを、一般的な體系内の均衡という概念と結びつけるという思考の過程をたどっているようにも思われる。この點については、パーソンズが、他の機會に、行為理論と生物學理論の關係を論じているのが、參考になる。

たとえば『一般理論』の後にあらわれた、ベールズ Robert F. Bales との共著『家族。社會化と相互行為の過程』Family, Socialization and Interaction Process, 1956. の付録、『生物學上の類比にかんするノート』⁽²²⁾で、パーソンズは、生物現象と社會心理現象との類比をあげて、「まず、單一の、内面化された『対象—動機の體系』 object-motive system の確立からはじまる、パーソナリティーの發達過程は、分裂によって分化と統合の過程に移る」とした。これに對應する生物的モデルは、授精卵細胞の「二分裂」binary fission である。そうして、卵細胞と精子細胞は、それぞれ、新生兒の「生體」と文化的規範あるいは價値の群^{グループ}とに對應する。動機的要素と文

化的要素とが結合された、一定の組織ができたときに、はじめて發達という過程がはじまる。そうして、發生の最も初期にみられる、二細胞、四細胞、八細胞などの段階のように、この發達の過程は、不連続的に進行するのである。この二分裂は、自然の世界で、非常に重要なものであるが、また、どんな體系についても、比較的單純なレベルから、複雑なより高いレベルにと進んで行くのに、最も「經濟的」な仕方とみなされる。

パーソンズが、生物現象と社會心理現象との類比に關心を抱くのは、元來、生物學と心理學の關係について、早くから理論的な考察をつづけてきたことからみれば、當然である。たとえば『社會行爲の構造』(The Structure of Social Action, 1937)で『心理學と生物學の關係について』というノート⁽²³⁾には、次のようなことがみられる。

「われわれが、人間行爲の主觀的な側面の諸條件ととりあつかっているのに、生物學の立場で考えると、それらの條件は、必要ではあるが十分ではない。……遺傳と環境ということばは、……生物的、心理的な要素の両方をふくむとしなければならない。」

ここには、心理學的な考察を生物學的な考察に還元す

る行動主義 Behaviorism に對する批判がみられる。しかし、同時に、「心的習性」(mental traits) が遺傳的體質により影響されるという面もとり上げており、心理と體質の關係に留意する點では、生物學的な觀點が、かなり濃厚である。このことは、その後の諸論著にも一貫して流れている。たとえば、『一般理論』にも、「一般化された欲求傾向の、體質的な成分と學習された成分」とが論じられ⁽²⁴⁾、「ふつう恐れとよばれている、危険への反應には、體質的な土臺がある」とか、「怒りを經驗する能力は、攻撃されたときに反擊する『素質』(disposition) とは、ちがうかもしれない。もちろん兩者とも學習されるだろう。しかし、いずれも、何らかの『生得的な土臺』(innate foundation) を持っているようにみえる」という表現がある。しかし、この「體質」、「素質」、「生得的な土臺」が、パーソナリティーの體系と、どのようにかわりあうかは、あまり、はっきりしない。

この點については、さらにパーソンズ理論と、アメリカ心理學における生物學的な傾向との關係をあきらかにする必要がある。その兩者の關係は、二つの側面をもっている。第一は、現代アメリカ心理學の主要な傾向のひ

とつである新行動主義 neo-behaviorism との結びつき、第二は、フロイト流の精神分析理論である。

まず第一の結びつきについては、すでに、前出『社會行為の構造』のノートで、行動主義に對するパーソンズの見解が、はっきり出されている。パーソンズによれば、行動主義は、「人間の行動を、生物學のことは還元する」⁽²⁵⁾ だけではなく、「はじめから、主觀のカテゴリーにふれることを排除するために、その客觀主義は、一つの閉じられた體系になってしまう。」

ここで、パーソンズが批判の對象にしているのは、ワトソン John B. Watson の行動主義だけではなく、ワトソンが提唱した、單純な刺激—反應 (S—R) 方式の機械性を修正しようとして、主として二〇年代の後半から試みられてきた、新行動主義 neo-behaviorism の理論にもおよんでいる。ただし、後者のはあいには、『社會體系』The Social System, 1951 のなかで、動物の行動と、シムボル過程や文化過程のレベル以下の人間行動の理解には、大きな役割を果すことが認められている。⁽²⁵⁾

「もちろん、純粋な行動主義者たることを堅持して、

主觀的な側面を回避することはできる。ただし、それには、つぎの二つの道のいずれか一つをえらばなくてはならない。一つは、行為理論の枠組を全くしりぞけて、生物學の枠組を守りつづけること。もう一つは行為理論の枠組を使うが、その精密化を『シムボル以前』pre-symbolic、つまり『文化以前』pre-cultural のレベルにとどめておくこと。このいずれかである。」

この個所の註で、パーソンズは、第二のケースの例として行動主義心理學者のスキナー Burrhus F. Skinner とハル Clark L. Hull の名をあげている。しかし、嚴密にいうと両者は、ともに、ワトソンの行動主義を修正した新行動主義の代表者であり、早く一九二〇年代から、精密な實驗と數學的な操作によって、動物の學習行動を分析している。⁽²⁶⁾ パーソンズは、スキナーとハルの研究が、「非常に重要な貢獻」をもたらすかもしれないことを認める。そうして『行動主義』の問題は、けっきょく、それが、科學者の望む精密さと慎重さを保ちながら、行為の枠組のより分化したレベルをあつかうことができるかどうか、ということに歸する。他の科學分野におけると同じく、≪ブディングの味は食べてみなけ

れば分らない」という。

ここで、パーソナル理論と行動主義の関係について、二つのことが語られている。

第一は、前記のように「行動主義」の名のもとに、パーソナルは、ワトソン流の行動主義ではなく、スキナー、ハル流の行動主義を考えており、その実験結果を高く評価していることである。新行動主義は、ワトソンの行動理論の原則である S (刺激) $\rightarrow R$ (反応) 方式に對して、 S (刺激) $\rightarrow O$ (生體) $\rightarrow R$ (反応) 方式を原則とし、當然、生體内の動機づけを中心問題のひとつにする。パーソナルの協力者であるトルマンは、新行動主義者の中でも、ゲシュタルト心理学の全體論的な立場をとり入れている點で、スキナーやハルの機械論的な還元説とは、かなり離れた地點に立っている。パーソナルが、スキナー、ハルの業績を部分的には承認しながら、自身の行為理論では、トルマンの行動主義に近づいたのも、ワトソンの還元説への反撥からである。⁽²⁸⁾

「生物的な體系としての生體と、行為の體系としてのパーソナルのあいだには、非常に重大な相互依存がある」が、「だからといって、この相互依存は、パー

ソナルを、生體の單なる《延長》としてあつかうことを許さない。」

このトルマンとパーソナルの接近について知るには、『一般理論』に收められたトルマンの『心理学的モデル』という章に展開された動機理論⁽²⁹⁾をみる必要がある。

トルマンでは、人間の行為(トルマンは「行動」behaviorを「行為」actionと同義に使っている。以下、「行為」に統一する)を分析する構成概念のうち、獨立變數として、(1)刺激、(2)「動因生起の状態」state of drive arousalと(あるいは)「動因飽和」drive satiation、(3)個人差をもたらず遺傳、年齢、性別などの變數、および、藥物、内分泌障害などでひきおこされる特殊な生理的條件など、の三つがあげられる。そうして、從屬變數としては、「行為の意味」action meaningを帯びた諸反應が考えられる。この獨立變數と從屬變數を、因果的な函数で仲介するのが、「仲介變數」intervening variablesである。仲介變數は、假設的な「構成概念」constructsであり、トルマンは、この仲介變數に、どのような特性を與えるかに應じて、三つの立場を區別する。

(1) 神経生理學的な立場。神経生理の特性を仲介變數に與える。ハルとその門弟たち、およびガスリ Edwin R. Guthrie⁽³⁸⁾ が代表者としてあげられる。トールマンによると、「ハルは、仲介變數を考えるに當つて、神経生理の構成概念を使つてゐることを否定しようとするが、そのような仲介變數のはたらきに關してはあからさまにではないにしても、ひそかに、そのような概念によりかかつてゐる。」⁽³¹⁾

ここでトールマンがあげてゐる二人のうち、より重要なハルの研究をとつてみよう。トールマンの批判は、ハルの『行動の諸原則』Principles of Behavior, 1943 に向けられてゐるが、その中でハルははっきりと、行動理論の明かす將來の見通しとして、「『社會科學』あるいは行動科學を、精神科學 Geisteswissenschaft ではなく、純粹な自然科學としてみる傾向」のあらわれてきたことをあげてゐる。それは、具體的には、「やがて、主要な神経學上の諸法則が、行動科學の基本原則にふさわしい形態をとるようになるだろう」という見通しである。⁽³³⁾ たしかに、ハルは、その最後の著書『行動の體系』The Behavior System, 1952⁽³⁴⁾ でも、單純な試行錯誤の學習か

ら出發して、課題解決、價值行動の高次な行動についても「自然科學的なアプローチ」を適用しており、「習慣構造」habit structure とか「反應ポテンシャル」reaction potential のような「神経の組織」neural organization を、仲介變數としてゐるから、トールマンの批判は、當つてゐるといえよう。

(2) 現象學的な立場。phenomenological trend 内省によつて得られた經驗上の諸特性を、仲介變數に與える立場で、フロイト理論の多くと、ゲシュタルト心理學が、これに屬する。

(3) 獨自モデル a sui generis model の立場。他の分野から類推した、假設的な構成概念の群として、獨自の特性をそなえたモデルを考える。フロイトが、貯水池になぞらえた「リビドー」libido や、レヴィン Kurt Lewin による、位相とヴェクトルの心理學⁽³⁵⁾などは、これに屬する。このようなモデルを考えるのは、全く、プラグマティックな立前からである。その有効性は、この「偽似腦のモデル」pseudo-brain model と、眞の神経生理學的なモデルのあいだに存する相關關係を見出す將來に委されてゐる。

ここで、トールマンの提案するモデルも、やはり、神経生理学的な過程との相関において考えられており、ハルのような、いわば、むきだしの還元説とはちがうけれども、やはり行動を生物学的な土臺にひき直して考えようとする点では、生物学主義とよんでもいいと思う。

さらにトールマンは、第四の立場として、ブルンスウィック Egon Brunswik⁽⁹⁶⁾ とスキナー⁽⁹⁷⁾ のように、仲介變數を、できるだけ省き、最初の獨立變數と、最後の從屬行動のあいだに、經驗で確められる諸函數を、ただちに展開しようとする方法をあげる。

たしかにスキナー自身も、その著書でトールマンの「仲介變數」の考え方をとらないと声明しており、その意味では、おなじ新行動主義の立場に立っても、スキナーの方は實驗條件を變數とし、その「實驗變數」(A) experimental variable と刺激 (S) との函數關係において反應 (R) を考えるのである [R=f(S, A)]。スキナーのように、實驗者による實驗の「操作」operation を變數とする立場は、行動主義に、「操作主義」operationalism の側面を加えるものであり、この操作自體が、觀察可能な「外面的行動」overt behavior であること、

う点で、ワトソンの行動主義の延長線上にあるといえよう。これに對して、トールマンの新行動主義では、仲介變數のモデルに、動機づけを導入し、「目的行動」purposive behavior を問題とするから、ワトソンの行動主義に目的論的な修正を加えたということが出来る。トールマン自身は、すでに、一九二〇年代の初期に、「目的行動主義者」purposive behaviorist と名乗っており、「目的行動主義」purposive behaviorism は、今日、彼の名と結びついているのである。

パーソナルの行爲理論の研究に、トールマンが寄與しているのも、その目的行動主義の中心概念になっている「目的」とそれに結びつく動機の關係が、出發点になっているからである。次に、その点をあきらかにするために、トールマンの欲求理論をさらにくわしくたどってみよう。⁽³⁸⁾

トールマンは、動機づけに、ドライブと欲求を區別し、前者を生理的決定因とし、後者を、それによってひきおこされた心理的、行爲的な「準備状態」readiness とした。欲求は、目標達成を完全にするための「完了的行動」consummatory behavior の行われる、基準的な目標状

況へ向おうとする準備状態である。

ある一つの欲求は、単一のドライブでおこされるのではなく、いくつかのドライブの結合によっておこされる。たとえば、飢えの欲求は「集合性」gregariousnessのドライブや恐れ of the ドライブからおこる場合がある。だから孤立感におちいる人たちが、危機にさらされている人たちは、過食するようになることがある。

この場合にも、ツールマンは、集合性をドライブに入れており、生理的な決定因としていのである。これは、あきらかに動機理論における生物學主義のあらわれである。

右のような欲求は、パーソナリティーのなかで、「欲求體系」need systemをつくる。欲求體系には、飢えの欲求のような個々の欲求のほかに、「リビドー欲求」libido needがある。このリビドー欲求の假定は、ツールマンの動機理論のひとつの特色であり、後にみるように、行爲理論とフロイト理論の関係をしめす一例となっている。

リビドー欲求は、主として、何らかの生理的エネルギーと相關し、その平均的な量は個人によってちがいがい、また、同じ個人でも、健康、疾病、日時によって増減する

ようにみえる。このリビドーは、獨自の目標をもたず、ただ、他の個々の欲求との接觸を通じて、それらの欲求の類推的な電磁氣エネルギーを増大させる。リビドーのエネルギーあるいは緊張が大きいと、他のあらゆる欲求部門にも、大きな緊張がおこる。つまり、欲求の全體系で、個々の欲求部門のエネルギーあるいは緊張は、基本的なリビドー部門の緊張と、何らかの相互作用的なバランスを維持する、と假定するのである。ここで欲求の電磁氣エネルギーは、正と負の電荷をふくみ、欲求が強いときは、電荷の量が大きく、弱いときは、小さい。

具體的に、飢えの欲求を例にすれば、次のようにいえる。この飢えにふくまれるエネルギーの量(正負の電荷)は、主として生理的な飢えのドライブの強さと、またある程度まで、刺戟状況(食物對象があるかないか)の性質によってきまる。また、他の條件が一定ならば、その時の一般的なリビドー緊張の強さによって左右される。飢えの欲求の緊張がたかまっているとき、行爲者は、食物に向う強い正の準備状態(大きな正電荷)と、食物以外の對象に抵抗する強い負の準備状態(大きな負電荷)をしめす。

このリビドー欲求と、個々の欲求との関係については、さらに、次のようなことが假定されている。

(1) 個々の生理的ドライブの条件あるいは刺激は、まず、リビドー部門の電荷の総量を増加することによって、ある特定の欲求をおこさせる。(2) リビドー欲求と、その特定の欲求とのあいだの膜の透過性がたかまり、リビドーからその欲求への電荷の流入が多くなる。(3) その欲求と、他の個々の欲求とのあいだの膜も透過性がたかまる。(4) そのたかまった透過性は、二方向性、単方向性のいずれかをとる。そうして(a)もし二方向性ならば、一つの欲求部門で増加した電荷は、隣接の部門に流入する。(b)もし単方向性ならば、(i) 欲求Aがおこり、AからBへの透過性がたかまると、欲求Bもおこりやすくなる。あるいは、(ii) 欲求Aがおこり、BからAへの透過性がたかまると、欲求Bは、弱められる。

以上の假定からトールマンは次のように経験的事實を説明しようとする。

(1) ある特定の欲求の生起は、一般的エネルギーの増加と相關する。例。飢えたネズミは、また活潑で活動的になりやすい。

(2) 一對の欲求の一つがおきると、他の一つの欲求も強くなりやすい。例。支配の欲求が強くなると、攻撃の欲求も強くなりやすい。

(3) しかし、右の逆は成立しない。例。飢えの欲求がおこると、たとえば攻撃の欲求は強くなるが、その逆は成立しない。

(4) 一對の欲求の一つがおきると、他の一つの欲求が弱くなることもある。しかしその逆は成立しない。例。飢えの欲求は、たとえば美的な欲求を弱めるが、逆は成立しない。

これを、マスロウ A. H. Maslow による、「欲求順位」 hierarchy of needs の假説⁽⁴⁾に従って、たとえば、「高い」欲求(たとえば知的あるいは美的欲求など)と「低い」欲求(たとえば飢え)が同時におこるとき、その兩者のあいだの透過性は單方向であり、常に、低い欲求が、高い欲求から、電荷を奪いとることになりやすい。低い欲求が満足されたとき、はじめて高い欲求もチャンスを持つのである。

ここまでの議論は、トールマンが、いわば、欲求の一般理論を、彼なりの構成概念と類比によって展開したものであり、行為の理論として、社会行為における動機づ

けの問題には、直接かかわってこない部分である。これに對して、欲求體系の構成という問題は、社會行爲の動機づけを論じる際に、その出發點となるものである。しかし、トールマンでは、この部分についての考察は、十分といえない⁽⁴¹⁾。たとえば、彼があげているマズロウの欲求順位論にみられる、精細な諸欲求間の相互關係の考え方などを、もっと取り入れる必要があるのに、それがなされていない。そうして、そのことは、のちにみるように、パーソンズの動機理論にあらわれる弱點でもある。

トールマンは、欲求の暫定的な基本リストについて、まず、「一次的欲求」primary needs に基本的な要求と回避——飢え、渇き、性、苦痛の回避(恐れ)障害物への攻撃、および一般的な、探究と好奇の欲求(あるいは認知的な位置づけの欲求)——をあげる。一次的欲求は、類人猿にもみられる欲求である。

次に、まだ、はっきりと區分されていない、二次的あるいは「社會—關係的な欲求」social-relational needs として、「親愛結合」affiliation(愛と承認の欲求)、支配、依存、服従などがある。トールマンは、このような二次的欲求も、大部分は生得的であり、文化の訓練を受けない

が、人間に近い類人猿について、研究すれば、信賴すべき結果が得られるという意見に傾いている。

さらに、トールマンは、三次的な欲求をあげる。それは、學習の産物であり、文化が生んだ目標のなかで、比較的普遍的なタイプのものに近づき、あるいは遠ざかうとする欲求である。たとえば、アメリカ文化では、富に近づき、貧困から遠ざかうとする欲望。職業上の成功に近づき、失敗から遠ざかうとする欲望など。

トールマンによれば、この三次的欲求は、オルポートの⁽⁴²⁾いう、欲求の「機能的自律」functional autonomy とは少しちがっている。オルポートの機能的自律では、ある欲求満足の目標に近づくための手段が目標となり、その手段を遂行すること自体が欲求を満足させるようになる。たとえば、はじめ、經濟的に安定しようという目標で金をもうけようとした人が、安定を得てからも、金もうけそのものを欲求の目標にする、守銭奴になるばあいである。

これに對してトールマンは、三次的欲求の目標とみられるものが、實は、より基本的な目標への信念にむすびついた、單なる手段あるいは下位目標にすぎないばあい

があるかもしれない、と考える。ただし、この信念が、非常に安定し、一貫しているばあいには、一つの三次的欲求を、プラグマティックに考えることもできよう、というのである。

右のように、トールマンでは、欲求體系を、一次、二次、三次の欲求から成るとするが、そのあいだの關係は、あまり明確でない。それは、欲求體系のなかで、一次的な欲求から、二次、三次の欲求が発生してくる條件を、發達史的に追及していないからである。この點に關しては、『一般理論』の中でトールマンとならんで欲求理論を展開しているマレーについても同様である。以下、マレーの所論を述べたのち、『一般理論』その他にみられるパーソンスの動機理論を、評價してみたいと思う。(續)

- (1) この方面でパーソンスの代表的な著書は、『The Social System, 1951. ガーネット・ミヤズの共同研究は『Character and Social Structure, 1954. トーナン①著』の『Social Theory and Social Structure, 1949. revised. & enlarged. edition, 1957.』
- (2) Toward a General Theory of Action, p. 53.
- (3) *ibid.* p. 54.
- (4) *ibid.* p. 5.

- (5) *ibid.* p. 107.
- (6) *ibid.* p. 108.
- (7) *ibid.* p. 5.
- (8) *ibid.* p. 7.
- (9) *ibid.* pp. 8—10.
- (10) *ibid.* pp. 10—11.
- (11) *ibid.* pp. 11—12.
- (12) *ibid.* p. 12.
- (13) *ibid.* pp. 14—16.
- (14) *ibid.* pp. 16—18.
- (15) *ibid.* pp. 18—19.
- (16) *ibid.* pp. 19—20.
- (17) *ibid.* pp. 20—22.
- (18) *ibid.* p. 22.
- (19) *ibid.* pp. 23—26.
- (20) *ibid.* pp. 110—111.
- (21) *ibid.* p. 112.
- (22) Family, pp. 395—396.
- (23) The Structure of Social Action, p. 85.
- (24) Toward a General Theory of Action, p. 13.
- (25) The Social System, p. 544.
- (26) 行動理論と社会システム①の代表的な業績は『The Behavior of Organisms. An Experimental Analysis, 1938.』
- (27) ナン①の代表的な業績は『Principles of Behavior, 1943. Behavior System, 1952.』

- (27) トーンマンの新行動主義とその目的行動主義 put-positive behaviorism における代表的な業績は、'Put-positive Behavior in Animals and Men, 1932. 近年初期の最近までの論文を収録した論文集『Behavior and Psychological Man, 1958. 参照。』
- (28) The Social System, p. 546.
- (29) Toward a General Theory of Action, pp. 279—342.
- (30) 条件反應を行動の單位とするサスキンの理論『The Psychology of Learning, 1933.』
- (31) Toward a General Theory of Action, p. 282.
- (32) Principles of Behavior, p. 400.
- (33) ibid. p. 19.
- (34) Behavior System, p. 344.
- (35) K. Lewin, The Conceptual representation and measurement of psychological forces. Contrib. psychol. Theory, I (1938), no. 4
- (36) E. Brunswik. Organismic achievement and environmental probability. Psychol. Rev., 1943, 10, 255—272.
- (37) 提出 The Behavior of Organisms.
- (38) Toward a General Theory of Action pp. 288—290.
- (39) ibid. pp. 319—321.
- (40) A. H. Maslow, "Higher" and "lower" needs. Journ. Psychol, 1948, 15, 433—436.
- (41) Toward a General Theory of Action, pp. 321—323.
- (42) G. W. Allport, Personality. A Psychological Interpretation, 1937.

(一橋大學教授)